

学的研究を志向して、一步を踏み出したいと決意した次第である。この方向における関心を、研究者と教師の集まりである「学習指導研究会」（昭和51年7月第1回例会）の活動を通して深めていきたい。

4. その他の活動としては、福村出版、大橋正夫・長田雅喜編、「心理学」（昭和51年4月刊）第4章第1節「学習とはなにか」、第2節「学習成立の型」を執筆した。また、黎明書房、大西誠一郎監訳、「児童心理学三つの理論」(Maier. Three theories of child development昭和

51年7月刊)の第3章「ピアジェの認知理論」を翻訳した。名古屋市青少年問題協議会より昭和50年度家庭教育問題調査専門委員の委嘱を受け、他の諸委員とともに「家庭教育資料——子どもの余暇利用の実態と家庭教育」名古屋市教育委員会(昭和51年5月)をまとめた。また、昭和49年度より特定研究科学教育「CAI算数・数学コースプログラムの開発と実験的実践化の研究」(代表者・国立教育研究所 主原正夫)に研究分担者として参加してきた。

2 年 目 の 経 過 小 嶋 秀 夫

2年目にして早くも繁忙となり、研究面でも教育面でも成果は不十分であった。今後は、仕事の方式を改めてより効果的な処理様式に切りかえる必要がある。

1. 親子関係に関しては、次のような点から、過去50年の研究の理論的・方法論的分析と評価を行うことを立案した：研究目的とその社会的背景、理論、概念と測定、結果と、それが学界と社会に及ぼした影響。この分析・評価の対象となる理論や問題：精神分析理論、Hall & Lindzey のいう社会心理的理論、学習理論、「経験と知的発達」の研究、認知的社会化の研究、比較行動学的研究。

2. いわゆる「認知様式」の領域での諸概念の測定に関しては、いくらかの知見が得られた。KaganのMFFの問題については、漸く1つの手掛りが得られ、日本心理学会第39回大会に一部を発表した。また、*Perceptual and Motor Skills*, 1976にも、精神測定上の問題として現われることになっている。WitkinのEFTに関しては、筆者が従来使用したものを改訂し、就学前幼児と低学年児童用のPEFTを作成した。15項目での内的整

合性は、5歳児で.89が確保できた。RFTに関しては昨年に開発した装置(ポテンショ・メータによる角度検出とディジヴォル・メータによる角度表示)に、ELによる刺激提示パネルをつけ、可搬性のある組立式暗室(1.8m×1.8m×3.5m)内で使用を始めた。MFF, WPPSI, PEFT, RFT, ラテラルティーなどからなるバッテリーを120名以上の幼児に施行した結果は後日発表される。なお、この研究に際しては、昨年に検討した児童研究の倫理問題のテスト・ケースとすることを考えた。

他のテーマに関しては、内外の研究者と若干の討論を行ったにとどまった。今年も学内の技官、学部の院生・学生諸君から、多くの協力をいただいたことを感謝したい。

なお、筆者は幸いにして、1976年8月から1年間、ハーバードを足場にして研究するチャンスが与えられることになった。この機会に、上述の1と2の研究を進めるとともに、広範囲のアイデアや研究結果に触れることを期待している。この経験を、研究面と教育面の両方に活かすことができればと思っている。

研究経過報告 —この8カ月の歩み— 田 畑 治

昭和50年8月1日より当教室のスタッフとして加わり、すでに半年以上経過している。着任後、10月24日に行なわれた就任講演は、「カウンセリングの実践と研究から学んできたこと」と題して、「いまここでの私」、これまででの私、そして「これからの私」をパーソナルあるいはプライベートな世界にまで言及しながら行なった。この講演で、名大着任の「イニシエーション」の意義を明らかにしえたと考えている。

さて臨床心理学は、きわめて主観的色彩の強い実践の世界での諸事象に目を開き、かつ客観的に記述し研究することを要請する。それは至難のわざであり、粘り強さが要求されると痛感している。研究者の倫理性や生き方も深くかかわってくるからである。

着任以来、ここに半年余りにわたって手がけてきている一連の研究を報告し、問題意識の一端を明らかにしたい。

1. これまで一貫してすすめてきた主要な研究テーマ「心理治療関係による人格適応過程の研究」の延長線上に位置づけられるものとして、一学校恐怖症青年の心理治療過程と治療的人格変化(Ⅲ)を報告した(相談学研究, 昭和50年1月)。さらに一不安神経症青年の長期にわたる心理治療過程と治療的人格変化を口頭発表した(日本心理学会第39回大会, 昭和50年9月)。

次年度は、さらに千葉大学時代から接触する機会があった情緒の問題に悩む成人女性のカウンセリングの方法論的検討も加えてより積極的に研究をすすめたいと考えている。幸いに本学でも、上記のような事例と接触しはじめており、また共同研究への機運も生じつつあるので、今後より一層発展させたい。

これらの研究と関連して、研究法としての「心理療法」の方法の論理について、筆者のなかで明確化する機会が与えられた(八木晃編「心理学研究法, 第1巻, 「方法論」東大出版会, 昭和50年6月)。

2. つぎに広く教育臨床にかかわるテーマとして前任校からの継続研究では、「教育体験の形成過程の研究」がある。これは遅々としてすすまない状況であるが、「教員養成大学・付属学校における教育実習改善のための理論的・実験的研究」(代表者千葉大学四宮晟教授)の分担課題の一部として、「教育実習体験の変容に関する追跡的分析」を口頭発表した(日本教育心理学会第17回総会, 昭和50年9月)。

ひとが誕生して以来、さまざまな環境のなかで、個体の内的・外的条件に強く左右されながら、多くの職業のなかから、ひとの子を指導するための「教職」を選び抜き、教師として生成していく過程の究明は、教育心理学の主要課題の一つであると考えている。かかる問題意識で依頼されてまとめたものに「楽しい学習を成立させるための条件」(「千葉教育」巻頭論文, 昭和50年10月)「教師・生徒・両親の力学——教師・親の教育心理学」(伊藤隆二他編「教育心理学を学ぶ」有斐閣, 昭和50年11月)がある。

現代青年の生き方との関連で考えてみると、きわめて複雑多様な条件と分散化した価値状況とが絡み合っ、教育学研究を建て前とする本学部としても等閑視できない課題だと受けとめている。まだ具体的研究計画は立てていないが、次年度はそれぞれ制度のちがう前任校と本学との差異に着眼しながら、予備的な参加観察の段階をより先にすすめられたらと念じている。

3. “グループ・アプローチ”の実践を通して感じてきていること。これは、たとえば千葉大学時代での教育臨床研究会(故正木正教授の精神をうけて続けた会)、カウンセリング・ワークショップ、企業のリーダーシップ・トレーニング・グループなどの会を通じての体験と学習の過程に関するものである。知らぬ人と人が集まったとき、異質と同質をとわず、グループがどのように発展し、展開していくか。どんな障壁が生じてきて、それがどのように克服されていくか。研究の関心は尽きない。

現在、カウンセリング研究会や学生相談研究会議のメンバーとして加わり、そのまっただ中に身をおいている。そこでは、グループ・メンバー相互の課題または自由な討議を通じて、体験的に自己発見や自己成長の問題に真正面からぶつかっている。大学という場での研究会グループが発展していったとき、そこでの成果としては共同研究の誕生が問われる。カウンセリング研究会は、まだそこまで成長し、発展しきっていないうらみがある。つらい思いをしながら、グループの方向性をまさぐりつつあるというのが、現状での卒直な報告である。

まとめ: 以上、いくつかの研究成果の報告と今後の研究に向けての問題意識の一端を明らかにした。筆者の研究方向は、ひと言でいえば時間的体験的な継続過程でのパーソナリティ変容ないしパーソナリティ形成の個別的研究とそれに伴う諸条件の分析的検討に焦点づけられている。今後とも、仲間とともに粘り強く努力を傾けたいと考えている。